

令和3年度版

# 愛えがお顔



感動ものがたり

「感動のエピソード」

& 「愛顔の写真」

愛媛県



# 銀行を、 人に合うかたちへ 変えていく。

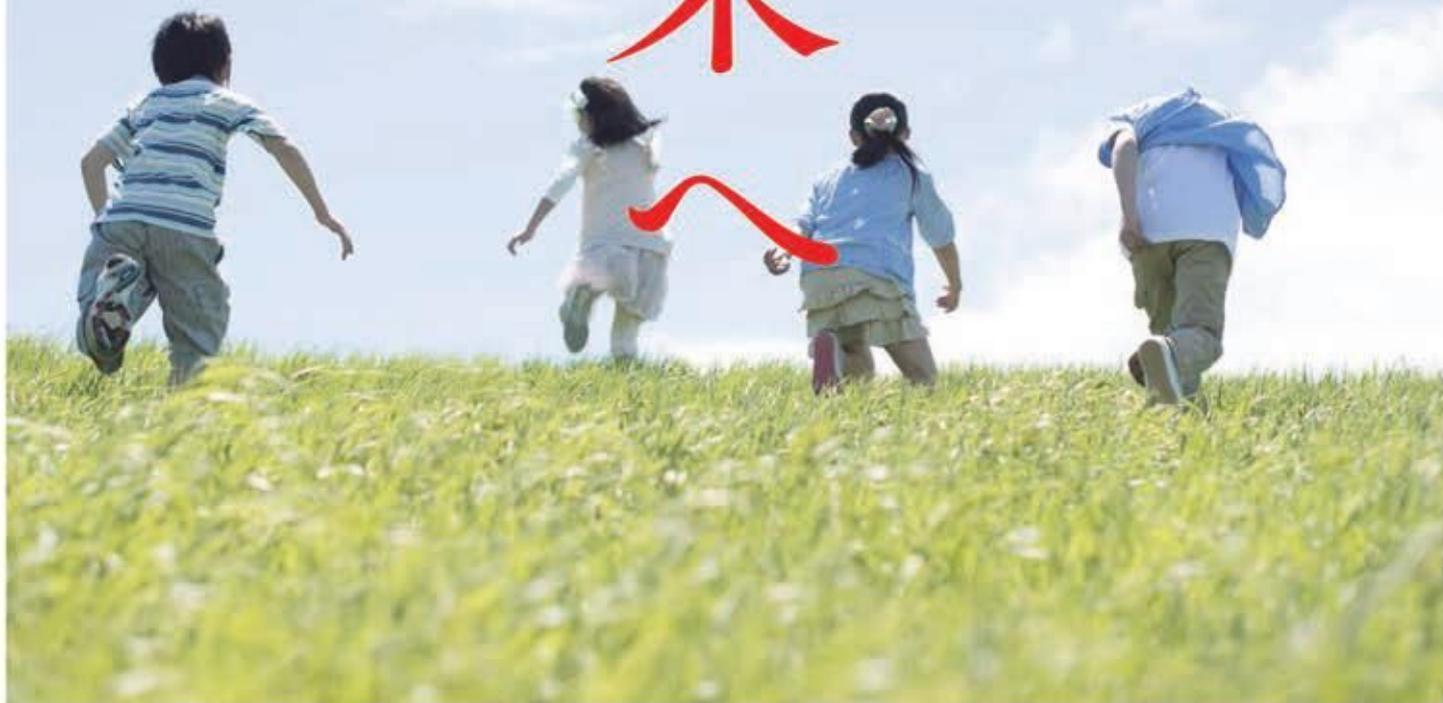
お金に向き合うことは、お金の先にいる人に向き合うこと。  
 だからこそ私たちは、デジタルを取り入れ変革を進めています。  
 心地よく、使いやすい、人にとってより自然な存在になれるように。  
 どこからでも、つながる。手のひらで、お手続きできる。  
 将来の計画を、プロとつくれる。悩みを、もっと分かち合える。  
 いま、着実にそれらを実現しています。  
 私たちはきっと、ずっと、こんな銀行になりたかった。

Better Money,  
Better Life.



伊予銀行

# 未来



すべてはお客さまのために  
未来へと進むみなさまを  
支え、応援し続けて  
ふるさとのみなさまと  
これからも、ずっと。

愛<sup>えがお</sup>顔とは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛<sup>えがお</sup>顔あふれる愛媛県」を

目指しています。



## 知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔」<sup>えがら</sup>を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図るために実施しているもので、今回で8回目を迎えます。今年度は、エピソード部門に、47都道府県と4か国から4,904作品、写真部門には、41都道府県から5,602作品の応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。

受賞作品の選考に当たっては、審査委員長である俳優の伊ッセー尾形さん、俳人の神野紗希さん、そして私が最終審査を行ったほか、写真部門については、愛媛県美術会の方々にも御協力をいただきました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠におめでとうございます。拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」が詰まった力作で、選考には大変苦勞いたしました

しました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝いた二つの作品は、幼い息子が自分の手に笑顔マークを描く理由を知った作者の思い、不可解だった祖父の行動の意味を知ることのできかけた祖父母の愛の形がえがかれた心温まるものがたりで、胸を打たれました。

長引くコロナ禍で厳しい状況が続く中、本作品集を多くの方々に御覧いただくことで、たくさんの「愛顔」が生まれ、その輪が全国に大きく広がることを切に願っております。終わりに、本事業の開始以来、審査委員長、そして名誉審査委員長を務めていただいた芥川賞作家の新井満先生が、昨年12月に逝去されました。改めて御生前のひとかたならぬ御功績に対し、深く敬意と感謝の意を表しますとともに、心から哀悼の誠を捧げます。

# 目次

## 「エピソード部門」(一般の部)

「知事賞」	笑顔マーク	中村 真李絵 (大阪府)	8
「特別賞」	ジャンケン	小松崎 有美 (埼玉県)	10
「優秀賞」	二度目の出番	渡辺 廣之 (大阪府)	12
	変わらない笑顔	畑中 智一 (愛媛県)	14
	かぐや姫	高島 緑 (香川県)	16
「入選」	祖父が残した愛	一色 智恵子 (愛媛県)	18
	泣き笑い	西村 美香 (大阪府)	20
	ささやかな笑顔を永遠に	倉田 久子 (愛知県)	22
	心に残る優しさ	馬場 霞 (香川県)	24
	蜜柑の笑顔	山下 真宏 (兵庫県)	26
	二種類の涙	山本 築 (福岡県)	28
「佳作」	パンダハオモシロイ	阿部 松代 (神奈川県)	29
	祖父の草刈り	帖佐 聡子 (島根県)	30
	私だけアルバムが少ないのは母の愛だった	奈良山 稔里 (北海道)	31
	笑顔で心の健康を	佐々木 晋 (北海道)	32
	道はつづく	横山 悠 (愛媛県)	33
	父と母へ	小西 真美 (京都府)	34
	大好きだなあって思ってたんだよ。	田村 夢子 (鹿児島県)	35
	優しさの花束	松山 あかね (神奈川県)	36

「エピソード部門」(高校生以下の部)

「知事賞」 愛のカタチ

「特別賞」 いっしょにわらおう

「優秀賞」 笑顔のために

祖母のりょうり

二人で眺めた夜空

「入選」 「大好き」ということ

一片の灰色

きらきらと照る

最高のプレゼント

私を支えてくれた大切なもの

池田 恋 (愛媛県 高校生) 38

佐藤 由都 (愛媛県 小学生) 40

川越 乙嬉 (愛媛県 高校生) 42

伊藤ジョシユア (米国・ハワイ州 高校生) 43

菊池 真奈美 (愛媛県 高校生) 44

沖 花果 (愛媛県 高校生) 45

田房 聖菜 (愛媛県 高校生) 46

三好 ミチル (愛媛県 高校生) 47

門口 徳克 (愛媛県 高校生) 48

河野 有紗 (愛媛県 高校生) 49

「写真部門」

『一般の部』

「知事賞」 夢は警察官

「特別賞」 丸かじり

「河原学園賞」 夏がやってきたよ!

「優秀賞」 おかえり

おしどり夫婦

見つかっちゃった!

祭りの衆

初めてのお餅

スマイル

息子と記念撮影

はじめまして!

馬場 このみ (埼玉県) 52

青野 早輝 (愛媛県) 52

門田 幸恵 (愛媛県) 52

寺澤 智恵 (愛媛県) 53

水口 ゆみ (徳島県) 53

三木 宏太郎 (愛媛県) 53

田中 雅之 (京都府) 54

渡部 博也 (愛媛県) 54

尾鷲 陽一 (埼玉県) 54

鈴木 文代 (和歌山県) 55

鄭 信義 (兵庫県) 55

『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

「知事賞」	二人の秘密	物部	煉太郎（愛知県）	高校生	56
「特別賞」	大きな笑顔	藤井	彩名（神奈川県）	高校生	56
「河原学園賞」	家族	今泉	日和（愛知県）	高校生	56

『一般の部』

「愛媛広告協会賞」	大玉すいか7, 200g	奥田	浩二（大阪府）	………	57
「愛媛県商工会議所連合会賞」	10人揃って、ハイチーズ。	宮谷	拓也（愛媛県）	………	57

『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

「愛媛県IT推進協会賞」	ばば！	渥美	満優子（愛知県）	高校生	57
「愛媛経済同友会賞」	夏休みの思い出	成田	衣織（愛知県）	高校生	57
「愛媛県歯科医師会賞」	夏色summer	宇貫	航平（群馬県）	高校生	58
「愛媛県獣医師会賞」	どうだ子よ	川村	悟史（愛知県）	高校生	58
「愛媛県情報サービス産業協議会賞」	幸せなとき	玉村	心優（福井県）	高校生	58
「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」	勝利のガッツポーズ	友澤	彩乃（熊本県）	高校生	58

「エピソード部門」一般の部

## 笑顔マーク

中村 真李絵（大阪府）

いびつな丸にニッコリ笑顔のマーク。

まだ小学校にもあがらない息子が自分で手のひらに描いた笑顔マークだ。私は、不思議な事をするものだなあ、とのんびり眺めていた。

毎日描かれる笑顔マークに違和感を覚えなくなった頃、夫が息子の笑顔マークを消そうとして、息子にこう言われた、と教えてくれた。

「僕、おともだちがいないから、自分でかいているの。」

私はハッとした。息子は3週間前に夫の転勤で幼稚園を変わったばかりだったのだ。お友達ができるかな、迷惑をかけてないかな、不安な顔で毎日自分の事を覗き込む母には心配をかけまい、と言えずにいたのだ。そんな幼心を想うと胸が締め付けられて苦しかった。

翌日、私はある作戦に出た。長らく帰省できていなかった実家の父母にビデオ通話を教え、息子と顔を合わせて話をしてもらおうことにした。

友達を代わりに作ってあげることはできないが、息子を愛する人が一人でも多くいることを肌で感じてほしかった。

見慣れた愛媛の景色の中、ビデオ通話に不慣れた父母が映った。息子の顔が映るだけで大喜びだ。その様子を見て、息子も久しぶりに心からの笑顔を見せていた。

たった10分。他愛もない天気の話をしたぐらいだった。それでも小さな画面から届いた笑顔の届け物は、孤独に戦っていた息子の心を満たすには十分だった。

その様子を見ていると、私は心配のあまりいつも八の字眉毛で口を出しすぎてしまっていたのかな、と反省した。ただ、笑顔で「おかえり」を言って温かく迎えるだけで良かったのかもしれない。

翌日から、息子の手には笑顔マークの姿は無かった。きっと、その役目を終えたのだ。

息子が心細い時、側にいてくれてありがとう。今日からは君の代わりに私が愛顔の母でいようと思います。

「特別賞」

ジャンケン

小松崎 有美（埼玉県）

兄弟が多いせい、何事もジャンケンで決めることが多い。残り一個の唐揚げや風呂に入る順番まで。凄く負けた記憶もないがそれなりに悔しい思いをした。八人兄弟の末っ子とあって負けるとよく母の背中で泣いた。

そんな母が昨年二度目の脳梗塞から余命宣告を受けた。院内はコロナウィルスの感染拡大により面会禁止。母の最期に立ち会えないんじゃないかという不安が過った。

案の定、病院から危篤の連絡を受けた時、私と長兄以外は他県在住のため立ち会いができないと言われた。ならば二人でと思った矢先「立ち会えるのは一人だけ」との事。何だか悔しくて切ない。

「兄ちゃん、いいよ」

私が言うジャンケンで決めようと兄が言う。無言のジャンケン。私

のチョコキを見るなり、兄がゆっくりパーを出した。いわゆるあと出しだ。「お前、行けよ。母ちゃんによろしく」

兄はパーの手で、最後、大粒の涙を拭った。

思えばこれまでも兄はこうして私を助けてくれていた。自分から負けて風呂掃除をし、唐揚げだって私に譲った。自分は水ばかり飲んで。

最後は私が母の手を握り、兄が待合室からトランシーバーで「母ちゃん、ありがとう」と叫んだ。涙で震え、かすれた声だった。その声を聞くなり、母は安堵したのか、静かに旅立った。

今でも母の最期を思い出しては涙する。満足にお別れができなかったこともそう。ちゃんと感謝を伝えられなかったこともそう。でもあの時の兄とのやり取りが私に愛顔をくれる。あと出しの優しさには何を出しても勝てない。いつか兄とジャンケンする時は大きく開いたその手で兄を抱きしめようと思う。

「優秀賞」

## 二度目の出番

渡辺 廣之（大阪府）

卒業式の翌日、主の去った教室に向かう。思い出に浸るためではない。この空き教室はもうすぐ、新入生たちの受験会場となる。だから、落書きが残っていたり、画鋏が落ちていたり、窓枠に埃が詰まっていたりすると、迷惑がかかる。空き教室の最終点検は、卒業生を送り出した担任の最後の務めなのだ。

小一時間かけて、教室のメンテナンスは無事終了。職員室に戻ろうとして、大きな忘れ物に気がついた。黒板の上に、クマのぬいぐるみが鎮座していたのだ。クラスの誰かが飾った、UFOキャッチャーの景品だ。飾り始めた年度初めには生徒たちもよく話題にし、教科担当の先生方にも意外に好評だった。しかし、時間が経つにつれ、貼りっ放しの掲示物のように誰にも注目されなくなった。だから、最終点検に臨む担任の私でさえ、大きなぬいぐるみを見落としそうになったのだ。

そして、あれから八年。定年退職した私のもとに、あのときのクラス  
の同窓会の案内状が届いた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、  
会は中止された。残念だ。あのぬいぐるみの余生を、卒業生たちに話そ  
うと思っていたのに。仕方なく私は、同窓会の幹事に短い手紙をしたた  
めることにした。

……八年前、皆さんが教室に残して行ったクマのぬいぐるみ。チョー  
クの粉にまみれつつ笑顔を絶やさなかったぬいぐるみのその後を、皆さ  
んに報告しておこうと思います。

認知症だった私の母は夜中に目覚めると、「ご飯を食べていない」と、  
昼と夜を間違えました。困った私はある夜、押し入れで眠っていたぬい  
ぐるみを、母の脇に置いてみたのです。すると母はぬいぐるみを寝かし  
つけ、朝まで熟睡するようになりました。皆さんのぬいぐるみに二度目  
の出番が訪れたのです。昨年、母は他界し、棺の中に納まったぬいぐる  
みは、母とともに天国へ旅立ちました。ありがとう。皆さんのぬいぐる  
みは、九十二歳の母の最後の親友でいてくれたのです。

「優秀賞」

## 変わらない笑顔

畑中 智一（愛媛県）

「行ってきます。」額の中の妻は、薔薇の花束を胸に、微笑んでいる。返事の無い出勤に、慣れたと言えば嘘になる。

雲一つ無い暑い日。入院している病院へ呼ばれた。狭い部屋の中で、妻と二人で先生からの最後の話を聞いた。妻は、入院中に覚悟が出来ていたのだろう。狼狽える事無く、しつかりした口調で、先生と話をした。私は、ただ、黙っているしかなかった。病室へ戻り、無言の時間が続いていた時、「全く抜け損だよ。」と、抗がん剤治療で、髪の毛の抜けた頭をなでながら、妻が笑って見せた。目に涙を浮かべ、泣き出したいのを必死に堪える笑顔に芯の強さを改めて思い知らされた。

妻は病気がわかってからというもの、受けられる治療は、あきらめる事無く、辛抱強く、我慢強く、頑張って受けた。しかし、病気の方も進行が速かった。

在宅で過ごすようになってから、日々出来なくなる事が増える状況に、

戸惑いながらも私への気遣いは、忘れる事が無かった。悲しみが顔に出る私を見ては、笑って冗談を言ってくる妻の気丈さと、優しさで、覚悟の出来ない私を励ましていてくれた。全くどちらが病人なのか、わからない。

「もう少し、生きていたかったなあ。」妻にしてみれば、誰も聞いていないだろうと思って言った、その眩きは、気軽に会えない県外の息子とのビデオ通話の後だった。ビデオ通話にて、息子の今後の話を楽しみ、笑顔で通話を切り、体の向きを変えた後だった。私には、どうする事も出来ない悔しさで、その場を静かに離れる事しか出来なかった。

私も、自宅でのリモートワークになり、二十四時間傍にいる状況を、妻は喜んでいた。こんなに長く、四六時中一緒にいるという事は、本当に無かった。自宅での看護の間に、一生分の「ありがとう」と笑顔をもらった。

「電気消すね?」「うん」「おやすみ」が、妻との最後の会話となった。

「優秀賞」

## かぐや姫

高島 緑（香川県）

平成二十五年夏。父の法要にきょうだいの家族が集まり、奥伊予の実家で賑やかな一日を過ごした。流しそうめんをすることになり、弟が山から長い青竹を切って戻ってきた。

「かぐや姫が出てくるかもしれんぞ」弟の言葉に当時七歳と四歳だった私の孫娘たちは、真剣な顔でじっと竹の根元を見つめている。

ふと思いついた。「かぐや姫入れとく？」母に耳打ちすると「おお、そうじゃ！」と大賛成。大人たちが作戦を開始した。甥が子どもたちを現場から遠ざけ、その間に大人たちはかぐや姫探した。いい物はないか、その時タンスの上に飾られた道後土産の姫だるまが目に入った。これだ！私は急いで持って出た。

弟が、割った竹の根元の隙間に素早く押し込むと皆を呼んだ。「さあ、割るぞ」大げさにナタを振り下ろして割れ目に刃を当てると、パクッとあいてコロン、金襴緞子の豪華な衣装をまとった姫だるまが転がり出た。

「おったあ！」大声をあげたのは大人たちだった。上の孫が慌てて拾い上げる。十センチばかりの愛らしい姫だるまに目を見張り、言葉を失っている。「よかったのう」「めでたい、めでたい」大人たちは芸達者だ。孫たちは大事に大阪の家に連れて帰った。実に愉快な日だった。

ところが仲秋の名月の晩、娘から電話がかかってきた。月から迎えにくると言って、孫たちがかぐや姫を抱いてベランダで泣いていると言う。いじらしさとともに騙した罪悪感で胸が痛んだ。でも、いつかきつといい思い出になるはずと、大人たちで話し合い種明かしをしないまま、今年九度目の夏を迎える。

大人たちはもちろん、孫たちも誰一人としてあの日の話題に触れたことはないが、成長した彼女らの中に今、かぐや姫は生きているのだろうか。この子たちが親になる日、世の中はどうなっているだろう。どうか遠い日の思い出を懐かしく語り合える穏やかな日々であってほしい。

## 祖父が残した愛

一色 智恵子（愛媛県）

祖母は、年に何回か宇和島から松山の我が家へ遊びに来ることがあった。祖母が来る日は、食事がいつもより豪華だったことも嬉しかったが、トランプや将棋などでたくさん遊んでくれることが楽しみで、まだ小学生だった私は、片道三十分ほどかかる学校の帰り道をいちもくさんに息を切らせ走って帰っていた。夜、決まって私と祖母は布団を並べて一緒に眠った。祖母は子守唄のように昔の思い出話をいつも聞かせてくれた。祖母は走るのが早くて、いつも運動会では一等賞だったこと。写真で見ることがない私の祖父の話。太平洋戦争での宇和島空襲のこと。そして、祖父が亡くなる直前、

「私が、あなたに降りかかる病気、子供たちにふりかかる病気、すべてあの世にもっていくから、何も心配しなくていい。」

と、祖母へ言い遺して旅立っていったこと。祖母はその言葉通り、五人

の子供たちを育て、大正、昭和、平成と生き、家族に見守られながら、自宅で祖父のもとへ旅立った。大往生だった。

私は、「愛」という文字を見ると、いつもこの祖父の言葉を思い出す。祖父が亡くなった後、空襲による恐怖におびえながら過ごす日々。女手一つで子供たちを育てることは私の想像を絶する苦労ばかりだったと思う。しかし、祖母は、祖父の残した「愛の言葉」をいつも心の支えとして激動の時代を生き抜いてきたのだと思う。

自分の命が燃え尽きようとしている中でも、残された家族を思いながら亡くなった祖父の愛と、その愛にこたえるように生き抜いた祖母。そして、今を生きる私は祖母が亡くなった年に、祖母と同じ子年の夏生まれの女の子を出産した。娘が生まれた日は、梅雨明け宣言の夏空が美しい日だった。娘を抱いて空を見上げると、祖父と祖母が優しく笑っている気がした。

「入選」

## 泣き笑い

西村 美香（大阪府）

だいぶ控えめに言ったとしても、祖母は困った人だった。人を傷つけるようなはずけずけとした物言いをするせいで、五人の娘たちは全員、成人すると寄りつかなくなり、孫たちとも疎遠になった。私の母は、祖母の末娘だ。

そんな祖母が認知症になった時、私は中学生で、ひどい反抗期だった。母とは口をきかず、いつも些細なことでイライラしていた。

その日に限って、いつも母だけが行く祖母の見舞いに、なぜ家族揃って行ったのかは記憶にない。ただ、むっつりと不機嫌な表情で、両親とは離れて歩く自分の姿が目には浮かぶ。

認知症になった祖母は、すっかり毒の抜けた顔をして、ベッドの上に座っていた。

祖母は耳も遠かったので、母はうるさいような大声で祖母に言った。

「私が誰だかわかる？ 私は、誰？」

「わかる」

祖母は小さくつぶやいた。

「わかるの？ じゃあ名前は？ 私は誰？」

母は容赦なく詰問するように畳みかけ、その滲み出る必死さは、私の神経を刺激した。まるで母の方が、記憶喪失の人みたいだ。

「それは、わかんね」

祖母が悲しげに答え、母はがっくりと肩を落とす。

だがその時、喜劇とも悲劇ともつかないことが起きた。祖母がボソリと言ったのだ。

「おめえは、マサキの嫁だ」

父があんぐりと口を開けた。マサキは父の名前だ。祖母は娘婿の名前は思い出せたのだ。

「え？」と母は固まった。

それから、母は弾けたように笑い始めた。とめどなく涙を流しながら、母はいつまでも、笑いがとまらなかった。私はあの日、気の強い母が泣くのを初めて目にした。

祖母が引き起こした母の泣き笑いの愛顔は、確かに私の中の何かを変化させたように思う。あの日を境に、私はゆるやかに反抗期の終焉を迎え、大人になっていったのだ。

## ささやかな笑顔を永遠に

倉田 久子（愛知県）

高校に入学したばかりの次男が事故で急逝したのは、十年前だった。当時二十歳の長男は、永別の時に大泣きしたものの、その後は変わらぬ様子で大学に通っていた。この子は打たれ強いのだと、私は勝手に解釈した。彼が一度だけ私に語ったことがある。「僕の年齢で兄弟を亡くした人なんていないだよ。だから誰にも僕の気持ちはわからないんだ」と。それは、たった一人で悲しみの重圧に耐えている息子の嘆きであった。けれどその頃は、私自身も悲しみの海で溺れており、彼に寄り添うことまではできなかった。

就職して二年目に、息子は鬱を発症した。たった一人の兄弟を亡くしてぼろぼろになっていた心を、さらに職場のパワハラと仕事の重いノルマが蝕んだのである。休職して治療し復職したものの、職場の状況は変わらない。再び心を壊した。今度はどんどん人柄が変わっていった。笑

わない。キレやすい。一触即発のような息子に、当たり前障りのない言葉  
を必要最低限しかかけられない。彼の人格を変えたのは、治療のために  
飲んでいた薬だった。息子はある日、すべての治療薬をどぶに捨てた。

それから数か月後の食事時、ほんやりTVを見ていた彼に、さらりと  
番組のコメントをした。なんと、くすつと笑ったではないか。息子が笑  
うのを見たのは、本当に久しぶりだった。気づいたら、私も笑っていた。  
笑顔は伝播するらしい。その後ゆっくりとはあるが、昔の息子に戻っ  
ていった。薬が身体から抜けていったのだ。今はもう、口下手だけれど  
優しい元の彼である。

二十代で、同世代が経験しない辛苦を一度に味わった息子。これから  
の人生こそは、幸せな日々の連続であってほしい。「大笑い」や「満面  
の笑み」でなくてもいいのだ。ふふつとささやかな笑顔がこぼれ出るよ  
うな毎日が、彼に、途切れることなく一生続くことを願う。それを見て、  
どこかで次男も微笑んでいるはずだから。

「入選」

## 心に残る優しさ

馬場 霞（香川県）

母が買い物をしていた八百屋のおばさんとの思い出は、小学五年生のとき、おばさんの優しい愛顔に包まれたことである。

昭和二十九年、そのころ父は大阪の親せきを頼り、出稼ぎに行っていた。夏休みに入るなり、母は夏風邪をこじらせて寝込んだ。枕元で昼食を食べていると、父への電話を頼まれる。自宅には電話がなく、母はその八百屋で借りていた。

父から給料が母の手元に送られてくる月末に、その中からそろばん塾の月謝をもらっていた。月が替わってもそれがない。電話の内容はお金のことだろうと気付いた。

おばさんは私の家庭が貧しいことや、父が出稼ぎに行っていることなどを知っている。父への電話は気が進まず、買い物客が見当たらなくなるまで、お店の前を右往左往した。

「かすみちゃんが買ひ物、珍しいわね。お母さんは」

「風邪で寝てます。電話を貸してください」

おばさんはコードを伸ばし、電話を廊下の奥の部屋に移した。そして、父との電話を誰にも聞かれない、私の気持ちを汲んでくれたのだから、ふすまを閉じてくれた。それでも言葉がもれないように、受話器を両手で包むようにして小さな声で話した。

父は仕事の都合で送金が遅れたが、明日には着くだろうと言う。父と話し続けたかったが、早くそのことを母に知らせて安心させたい。そのはざまに気持ちは揺れ動く。わずかばかりの通話にもかかわらず、受話器は手汗でびっしょりと濡れていた。

通話料金を払おうとすると、おばさんは母が元気になってからで良いと微笑む。それにあわせて、真っ赤なスイカをいただいた。胸は熱くなり、お礼の言葉が出なかった。数日後、母が回復してふたりでお礼にかがったとき、おばさんは愛顔と明るい声を絶やさなかった。七十年近く経ったいまも、あのとときの優しさが鮮明によみがえる。

「入選」

## 蜜柑の笑顔

山下 真宏（兵庫県）

東京で自堕落な学生生活を送っていたある夜、叔父から下宿に電話が掛かってきた。

「親父が昼に下血し、明日にでも手術になりそうなので帰れたら帰って来い」

滅多にない叔父からの電話であり、その夜は色々悪い事ばかりが浮かび、ほとんど眠れなかった。翌朝、駅構内で朝食のパンと蜜柑を買って新幹線に乗り込んだ。蜜柑をひとつ食べ、知らない内に眠ってしまった。

静岡を過ぎた辺りで、ふと目を覚ますと、あっけにとられる光景を目にした。何と座席と座席の間に置いていた蜜柑をおばあさんが美味しそうに食べていた。ふと目が合った瞬間、屈託のない笑顔でこちらに向かって少しお辞儀をしたようにも見えた。とても、

「その蜜柑、僕のんですけど」とは言えず、また寝たふりをすることにした。

今朝、自宅との電話のやりとりで、普段は冷静な母の狼狽ぶりから、父の容態が危機的な状況であることが分かった。

そんな状況下でのおばあさんの満足気な自然な笑顔だった。目を閉じても目が合った一瞬のおばあさんの悪げのない笑顔が目に浮かび、自分でも微笑んでいるのが感じられた。その後もうとうとしていたため、目が覚めた時にはおばあさんの姿はなく、蜜柑もそのまま座席の間に整然と残されていた。

病院に着くと、父は生氣のない表情で手術室に向う直前だった。長時間の手術の間、家族全員、祈るような気持ちだったが、手術成功の報で涙交じりの歓喜の渦だった。私も少し落ち着いてこの場に臨めたのは、あのおばあさんの屈託のない笑顔のおかげだったように思えた。

その後も幾つもの苦難に接したが、なぜかいつもあの時のおばあさんの笑顔が思い出され、なぜか不思議な余裕が生まれた。時間を巻き戻せるなら、改めておばあさんに感謝の気持ちを込めて伝えたい。

「おばあさん、今迄ありがとうございます。これからもまた笑顔、お借りしますよ」

## 「佳作」

### 二種類の涙

山本 築（福岡県）

「もう一生分の涙ば流したけん」

三十代半ばで肝臓がんを患った父を看取ったあと、目元を赤く腫らした母は自分に言い聞かせるように呟いた。

実際、父が亡くなった後の母子の生活は泣く暇もないほど忙しかった。稼ぎ手を失った一家の生活は危うく、母は仕事を掛け持ちして我が家の経済を支えた。当時小学生だった私も父の不在を寂しく思うことがないわけではなかったが、家族のために身を粉にして働く母の手前、亡くなった相手を偲んでも落ち込むことはできなかった。懸命に前を向く母に押されるように、下手なりに家事を手伝い、高校生になる頃には少しでも家計の足しにするためにアルバイトをはじめた。

目まぐるしい日々を過ごしていたようだったが、不思議と母と会話を交わす時間はあった。私は友だちや進学について悩みをいつも母に相談した。母はそのたびに私の背中を押してくれた。もちろん的確なアドバイスばかりとは言えなかったが、その言葉の一つひとつに母からの愛情を

受け取ることができた。

そんな母との二人三脚の生活は私の就職によって幕を閉じた。

長年住み慣れた家を離れるとき、母はバス停まで見送ってくれた。季節を告げるには少し早い雪が降っていた。私はスーツケースに積もった雪を払いながら努めて普段と変わらない会話を続けた。すると、とうとうお別れの言葉を交わさなければならぬという段になって、母は、立派に成長してくれてありがとう、と手のひらで頬を押さえながら頭を下げた。手のひらからは収まりきれなかった涙が細い線になって流れていった。私は思わず胸が詰まりそうになりながら、しかし、からかうように言った。

「もう涙は一生分流したんじゃないやなかったっけ」

「嬉し涙がまだ残った」

その日の母親の愛顔は、季節外れの雪とともに暖かく私の胸に残っている。

## 「佳作」

### パンダハオモシロイ

阿部 松代（神奈川県）

父が亡くなって二十年以上経つが、遺された本の中にまだ「父」は生きている。

広島で育った父は中学生のときに被爆し、亡くなるまで後遺症に苦しんだ。健康も尊敬していた父親も戦争に奪われ、祖母によれば、お笑い好きの明るかった性格が、何事にも無気力・無関心な暗いものになってしまったという。私を知る父はまさに後者、会話らしい会話をした記憶さえない。

生前、父は戦時中のことは一切語らなかった。それは思いついたくもない過去だからだろうと思っていたが、遺された本を見て驚いた。戦争に関するものばかりだったのだ。ページを捲ると、ところどころに線が引かれている。特攻隊員の「俺には違う生き方があったのに」という言葉には紙が破れんばかりの筆圧。自分の思いを本にぶつけていた父、誰かと思いを共感したかったのかもしれない。覇気はあったのだ。もっと父と話すべきだったと後悔した。そして、「線」を見つづけるたびにそこに引いた理由を考え、父

と会話した。

ある日、小説のなかで、娘が父親に向かって「なにか面白いことを言ってみよ」という場面の余白に、「パンダハオモシロイ」と書かれた父の字を見つけ、吃驚した。「面白いことを言ってみよか？ パンダは尾も白い」というのは子どもの頃に私がよく言っていた言葉だった。父はいつも無反応だったが、実は聞いてくれていたのだ。そして父のユーモラスな一面も失われてはいなかったようだ。

長年抱いていた寂しさやわだかまりがスッと消えていった。父に対して持っていた寒々とした感情が人間らしい血の通ったものへと変わっていく。「絆」が生まれた喜びがふつふつと込み上げてきた。全身の細胞が一つ一つ笑顔になっていく感覚。

いま父がいて「お父さん、なにか面白いことを言ってみよ」と言ったら、父はどんな反応をするのだろう。はにかんだ笑顔が浮かび、父との距離がまた少し縮まった気がした。

## 「佳作」

### 祖父の草刈り

帖佐 聡子（島根県）

耳に刺さるような蟬の声。むせかえる雑草の匂い。家の庭先を見ていると今は亡き祖父のことを思い出す。私が小学生の頃、今のように学童保育はなく、夏休みは決まって兄妹で留守番をしていた。母は出勤前、戸締りやガスの使い方、妹の面倒と兄に何度も言い聞かせた。

「誰が来ても、絶対玄関を開けちゃダメよ。」

分かったと、兄妹で元気よく返事をしたものの、母の言葉でかえって不安になり、外で物音がすれば、窓に張り付くように見ていた。

ある日、カタンと家の門を開ける音がした。

「なあんだ。じいちゃんかあ。」

恐る恐る窓を覗くと祖父だった。物音の主が知った顔だと分かると、嬉しくなって胸を躍らせ玄関に走った。

「いや、ちよつと草刈りば、してやろうと思つてなあ。」

祖父は、少し照れくさそうな笑顔を見せ、大きな草刈機で庭中の草を刈っていった。それまでしかめっ面だった兄も急に顔を綻ばせ、じっと祖父の後ろ姿を見ていた。

「じゃあ、また来るけん。」

汗だくになった祖父は家にも上がらず米や野菜をどっさり置いて帰っていった。少し寂しかったが、数日後またふらりとやって来た。

「今度は除草剤ば撒いてやろうと思つてなあ。」

うだるような暑さの中、黙々と作業を続ける姿に、何もこんな時にしなくても、だんだん気の毒になった。その後も庭木の剪定や害虫駆除と時々思い出したように、けれど決まって両親が不在のときにやって来た。

先日、実家に帰省した時、祖父の話になった。実は留守番で心細かった兄が、涙ながらに祖父母の家へ電話をかけていたことを知った。祖父は草刈りを口実に、遠方から私たちの様子を見に来てくれていたのだ。今になって祖父の優しさが伝わってきて、胸がじわつと温かくなった。

青々と生い茂る庭の雑草の中に、草刈り機を手にした懐かしい祖父の愛顔が浮かんだ。

## 「佳作」

# 私だけアルバムが少ないのは母の愛だった

奈良山 稔里（北海道）

「どうせ私はどうでもいい子なんでしょ！」

中学二年生。思春期真っ只中。思い返せばそれはもう恥ずかしいくらい、私は反抗期がひどかった。これは学校で出た課題のために、自分のアルバムを探したときのことだった。

奥の部屋で眠るアルバムの棚を前にして気付く。姉と弟のものより、私のアルバムが一冊少ないのだ。ひねくれていた私は「お姉ちゃんは第一子。弟は末っ子だけど長男だ。二番目に生まれた次女なんかには、両親も親戚も特に何の思入れもないんだ。だから、写真も二人より少ないんだ」と思った。それから、極端に写真が嫌いになり、アルバムの中の自分は分かりやすく不機嫌な顔をしている。

数年経ったある日の夜。お酒を飲みながら、あのアルバムの話を母にすると、ああ、と眉を下げながらこう言った。「小さいとき、あんた喘息でよく入院してたでしょう。家にいるより病院にいる方が長いくらいで、写真がさ、病室ばっかりじゃ切なくてね。撮れなかったのよ。だからその

分、枚数が少なくなっちゃって……。でもそんな風に思わせてたなんて、知らなくてごめんね」

たしかに私のアルバムには病院での写真なんて一枚もなかった。父に話を聞くと、頻繁に発作を起こす私を、母はずっと寝ずに看病していたという。私単体で写っているものより、家族や姉弟との写真が多かったのは、私が元気な時にみんなで出かけていたからだったのだと思い至ると、涙が止まらなかった。

なんて浅はかだったんだろう。写真には写らないところで、こんなにも愛情を注いでもらっていたことに気付かず、どうでもいい子だなんて勝手に思い込んでいたのだから。もっと早くに知っていれば、と少々苦い思いを抱えつつ、私は十数年前の不機嫌な自分を眺める。今の私は写真を撮ることも、撮ってもらうことも大好きだ。一人暮らしの棚の上にある大きめの写真立ては、今年も五人家族の愛顔が収まることを楽しみに待っている。

## 「佳作」

### 笑顔で心の健康を

佐々木 晋（北海道）

晩年の父は脳梗塞の後遺症で言語障害を患っていた。「ライオンはまだか？」と夕刊が来たかどうかを尋ねるほど、父の話す言葉は滅茶苦茶で何を言いたいのか見当もつかなかった。同じように父にとっては、他の人が話す言葉は理解できないものになっていた。コミュニケーションが取れなくなった父は次第に周りの人たちから疎まれていくようになる。

ある日、薬局にひとりで薬を取りに行ったのに、いつまで経っても帰ってこなかったことがある。やはりひとりでは無理だったかと心配で薬局に行ってみると、父がスタッフの人と揉めていた。というよりも、父の意味不明な言葉にスタッフの人が困り果てていた。

どうやら、こういうトラブルだったようだ。

薬の調合が終わり、父の名前を呼んだのに誰も取りにこない。何度も名前を呼んだが、反応がない。仕方がないのでそのままにしておいた。父は父で、いくら待っても自分の名前が呼ばれない。あまりにも待ち時間が長いので抗議すると、それすらも無視された。

父が悪いのは明白だ。それなのに、事情を知った薬局のかたがたは「私たちの配慮が足りませんでした」と頭を下げるのだった。そして、父が次に来た時には、スタッフなら誰でも特別に対応できるようにしてくれた。

親切な薬局スタッフのおかげで、その後の父はスムーズに薬を手にできるようになった。しかも薬局に行くのを楽しみにしているようだった。こっそり父の薬局での様子を聞くと

「いつも楽しそうに私たちとお話してから帰っていきます」との答え。

「でも、父が話している言葉は支離滅裂で、内容は理解できませんよね」

「確かにそうです。でも、私たちが笑顔で頷くだけで、嬉しそうに笑顔を返してくれますよ。それもまた心の健康には必要でしょう」

そこまで気を使ってくれる人たちがいてくれて、笑顔のやりとりだけでもできた父は本当に幸せだったと思う。

## 「佳作」

### 道はつづく

横山 悠（愛媛県）

何年か前の夏休み、旅程の合間に墓参りをしたあと、母方の祖父母の家に立ち寄ることがあった。祖父母が他界して数十年、叔父が草刈りに訪れるだけの家は、思っていたより清潔な感じがした。ぎしぎし鳴る床にわあきやあ騒いでいた娘たちは、いつのまにか扇風機の下にならんで眠っていた。私はふと、記憶のなかにある祖父と歩いた道を辿ってみたくなった。私も休むね、と言う妻に、すこし歩いてくるよ、そう言って、私は外に出た。

こどものころ、新幹線と特急列車を乗り継いで、夏休みの数日だけを過ごした祖父母の家。私や弟の好物でもてなしてくれる祖母を横目に、「散歩に行くぞ」と言う祖父にしたがって、私は照り返す外へ出たものだった。

銭湯の角を曲がったところに、がたついたドブ板がまだあった。祖父が顔を洗っていた井戸やカップ酒を買っていた自動販売機はもうなかった。旧道を渡ると真っ黒な石碑があつて、そのむこうに丘が見えた。その生意気そうな眼つきがええよ、祖父は私の顔を覗き込んでよく言った。私にはそれが嬉しかった。

床屋の前で道路に水を撒いていた人が手をとめて、市川さんのとこのお孫さんかね、と聞いてきた。よくわかりましたね、とおじぎをすると、「背格好がよう似とるから」とおじさんはタオルで汗をふいた。私はおじさんに一度髪を切ってもらったのを思い出した。「おじいさんはよくあなたの話をされてました」と笑いながら言うので、「どんな話ですか」と聞いた。そのとき、床屋の後ろの踏切に電車がやってきて、おじさんの声をかき消した。おじさんはかまわず愛顔で話している。私も聞こえない話を愛顔で聞いている。

電車が通り過ぎると、蝉の声がした。ではお元気で、私はおじさんと別れた。祖父はおじさんにどんな話をしていただのだろう。そう考えながら歩く私の前に、「別にほめとりゃせん、それよりあの子らが起きとるかもしれん、早よ歩け」と言う祖父の姿が見えた。

## 「佳作」

### 父と母へ

小西 真美（京都府）

二〇二一年二十九歳の夏、私は忙しく過ごしています。今日も看護師の仕事を終えて、急いで新幹線へ乗り込み東京へ。東京二〇二〇パラリンピック閉会式の練習です。観客は居なくとも国立競技場のフィールドから見上げる景色は最高です。

二十一年前、八才の私は殺風景な病室で過ごしていましたね。松山赤十字病院の小児病棟の一番奥、銀色の重たい扉の中の隔離室で闘った日々を思い出します。小児癌の治療で痩せ細り、髪は抜け落ち、免疫力も無く無菌室に居た私が、二十一年後に五輪の舞台上で踊っているなんて、想像していましたか？

私がダンスを始めたのは小児病棟のプレイルームで踊るお姉さんに出会ったからでしたね。彼女に憧れ、元気になったらダンスをすると言ったのを覚えています。その後私がダンスを始められたのは憧れだった松山東高校に進学しダンス部に入部してからでしたね。入院中は全く小学校へ通えなかったけど、勉強の遅れなく日常に復帰出来たのは病室で二人が熱心に勉強を見てくれたからです。さすが小学

校の先生達。念願の東高でダンスに没頭した三年間は私の宝物です。その後看護師を目指した私の国家試験の時に母はこんな手紙をくれましたね。「真美が病気になった時、母さんは毎晩神様に祈っていました。『真美は将来全世界に役立つ人間になります。その命をたった八才で奪ってしまつたら、全世界の大損害です。絶対に真美の命を守って下さい。』そして真美は元気になった。必ず合格して真美を待っていてくれる人達の元で社会人としてのスタートを切る事でしょう。」

どんな時も私の生きる力を信じ愛顔いっぱい育ててくれた父と母を尊敬しています。母が祈ってくれていた程にはまだ私は人の役に立てていないけど、私を待っていてくれる患者さんの為、私のダンスを楽しみにしてくれている人の為、今日も愛顔いっぱい頑張ってきます。

## 「佳作」

大好きだなあって思ってたんだよ。

田村 夢子（鹿児島県）

娘は赤ちゃんの頃の写真が少ない。

卒園記念の文集に0歳時の写真を載せることになり、パソコンの中のデータを見てみたけれど提出できるような写真がない。後悔と、娘への申し訳なきでいっぱいになった。

その時、後ろからパソコンの画面を覗き込んできた娘が一枚の写真を指差し大笑いし始めた。

それは、娘がハイハイができるようになった頃の写真。当時キッチンに入ってこれないようにベビーゲートを設置していたのだが、娘はそれを突破した。そして、倒したベビーゲートの上でうつ伏せで寝てしまっている。

「変な所で寝てる！」とケタケタ笑う娘。

ふと、「ねえ、この時どんなことを考えてたの？」と聞いてみた。

娘は「うーん。ちょっと待ってね。思い出すから。」と言って真剣な顔で考え込んでしまった。冗談のつもりだった。記憶なんてあるわけない。「ごめん。冗談だよ。」と言おうとした時。

「あ、そうだ。ママのことが大好きだなあって思ってたんだよ。」と、パッと花の咲いたような愛くるしい笑顔で言った。

私は心臓がキュツとなった。

娘は双子だ。一分違いで産まれた弟は痲癩持ちで常に抱っこ。逆に娘は心配になるくらい手が掛からなかった。私はいつも弟のことで手一杯。娘をゆっくり抱っこしてあげたことがあっただろうか。

写真に写っている娘は、キッチンにいる私の近くに来ようと一生懸命ベビーゲートを突破してきたんだろう。こんな写真撮ってる場合じゃなかったのに。抱っこしてあげればよかったのに。この写真を見るといつも胸が締めつけられていた。

だから、そんなことを言ってくれるなんて思いもしなかった。ずっと心の中にわだかまっていた後悔が、娘の愛顔と言葉ですーっと消えた。ありがとう。ママも大好きだよ。

## 「佳作」

### 優しさの花束

松山 あかね（神奈川県）

その年の四月一日、八歳と十一歳の私と姉はそわそわしていた。今日は両親の結婚記念日で、私たちは三か月も前から二人をいかにして驚かせ喜ばせるかを何度も話し合い計画を進めてきた。花が大好きな母に、お小遣いを出し合っ  
て綺麗な薔薇の花束を贈る事、誕生日おめでとうの曲を替え歌にして、結婚記念日おめでとうの歌を披露することを決め、毎日こっそりと練習を重ねていた。両親を絶対に喜ばせたいという気持ちは私たち姉妹に異様な緊張感をもたらしていた。その日の放課後、私と姉は近所のスーパーの隣にある、強面のおじさんが一人でやっている花屋へ出かけた。おじさんに、薔薇の花が母の好きな花である事、予算は千五百円である、絶対に喜ばせたい事を恐る恐る小さな声で説明した。おじさんは「よっしゃ、わかった。」と一言言うと、薔薇がたっぷりと使われた豪華な花束をあっという間に作ってくれた。幼い私たちですら、それはおじさんの優しさが目一杯込められた予算度外視の花束だとわかった。それ程素晴らしかった。豪華な花束と自作の歌は、

計画した当人達も戸惑う程に両親を喜ばせた。母はもちろん、父までもが涙をポロポロ流して喜ぶ姿を見て、大成功だ！と物凄く誇らしい気持ちになった事を今でも鮮明に覚えていいる。母は何度もお礼を言った後、母親らしく「これいくらした？」と聞いてきた。翌日、母は私達を連れて、花屋へ向かった。私達を見るなり、おじさんは「昨日はどうだったね？お母さん達は喜んでくれたかね？」と尋ねてくれた。小さく頷く私をみて、おじさんは満足気だった。母は、丁寧にお礼を言い、その花屋で一番大きな幸福の木を購入して家に帰った。その木は三十年経った今も実家があり、私達家族の幸せを見守ってくれている。あの時の花屋のおじさん、心からありがとう。

「エピソード部門」高校生以下の部

## 愛のカタチ

池田 恋（愛媛県 高校生）

私のおじいちゃんは不思議すぎる。今まで料理もまともに作れなかったのに、なぜか急に練習するようになった。定年までずっとタクシーの仕事をしていたのに、全く関係ない介護の資格をとろうとしている。考えてもおじいちゃんの心は謎だらけ。そろそろ探偵でも雇いたい。

高一の冬、やっとおじいちゃんの謎が解けた。全てはおばあちゃんのためだったのだ。

私のおばあちゃんは、パーキンソン病という病気でもう言葉をしゃべることができず、一人では動くことも出来ない。私の事も忘れてしまっている。

おばあちゃんは元々入院していて、様々な病院に行っていた。おじいちゃんは毎日毎日病院に来ては、ご飯を食べさせていた。そしておじい

ちゃんは親戚たちを呼んで、こう宣言したのだ。

「おばあちゃんを家に連れて帰る。愛しているから最後まで面倒を見たいんだ。」

周りからの反対を押し切り、高二の春、おじいちゃんは介護を始めた。初めは下手だった料理も、いつの間にかまるで料亭で修業しました、と言われてもおかしくないほど上手になっている。おむつを替えてあげたり、お風呂に入れてあげたりと大忙しだ。

「毎日けい子さんと居れて楽しいよ。」

その言葉を聞いて涙が溢れ出た。二人の本当の愛のカタチを見たと思った。昔からずっと支えられてきたから今度は支える立場になりたいというおじいちゃんの気持ち伝わってきた。

今でもおじいちゃんは介護を続けている。おばあちゃんは家にいる方が良く笑う。それはおじいちゃんという存在がいるからだ。私は思っている。実はおばあちゃんも昔、私にこう言っていた。

「私はこうじさんを愛しているんだよ。」

いつまでたっても二人は相思相愛のままである。

「特別賞」

いっしょにわらおう

佐藤 由都（愛媛県 小学生）

ぼくは、二年生です。ちょっとはずかしいので言いたくないけどなき虫です。おとうとは、2さい10か月ですが、がまんづよいです。ぼくがなくと、

「なかにいいよ。なかにいいよ。」と、ティッシュをもってきてくれます。

この前、知らないおじさんがきて、おとうさんのオートバイをもってかえることになりました。ぼくは、さみしくなっていしまいました。そしたら、おとうとがしんぱいして、

「いっしょにわらおう。いっしょにわらおう。」となくさめてくれました。おとうとは、ちいさいのになくよりえがおがいいと思っています。そのことばで、かぞくは、えがおになりました。ほんとうは、ぼくがおとうとを、なくさめてあげないといけないとわかりました。ぼくも、お

とうとのためになってあげたいし、おてほんになってあげたいです。ぼくは、なき虫なので、気をつけたいと思います。

かぞくみんなが、えがおでいるのがたのしいです。えがおは、みんながいい気もちになります。こんどおとうとがないたら、

「なかにいいよ。いっしょにわらおう。」

と、ぼくがはげましてあげます。

## 笑顔のために

川越 乙嬉（愛媛県 高校生）

私の家は中華料理店だ。両親二人で、小さな店を営んでいる。共働きというのはめずらしいことではないし、仕方のないことなのだが、私は幼いころからこの家庭環境を少し憎んでいた。母が家に帰ってくるのは昼休憩の少しの間。家族でごはんなどほとんどなく、毎日ラップをかけたものを温める日々。参観日や学校行事などは期待したこともなかった。高校生になった今では、好都合のことも多いが、小学校低学年のころなんかは、他の家と比べると何度もおこられていたように思う。そういったこともあり、私は両親の店にあまり立ち寄りなくなった。

しかし先日、私の家に泊まりにきていた友人が急に、「ご両親のお店行ってみたい」と言い出した。私はぎょっとしたが、夕食をふるまえるほどの技術はもっていなかったため仕方なく友人を連れて両親の店を訪れた。店にはコロナ禍だというのに思ったよりお客さんが入っていた。少し待つて席につくと、そこにはいつもと違う両親の姿があった。いつもは、買い出しに行っているのか仕込みをしてい

るのか、たまに家にいると思った時は、全く生気を感じられない父が、大きな鍋をふって生き生きと料理を作っている。母は常連客っぽい人とお話をしていたが、こちらに気づくとにこりと笑った。私は目をそらすようにとつさに店内を見わたした。どのお客さんも楽しそうに笑っている。いつも疲れきっている姿の両親が作り出す、店の雰囲気や温かい空気感はとても不思議に感じられた。料理がくると、友人は「おいしそう」と顔を輝かせ、一口食べると満面の笑みが変わった。見ると、料理は飾りつけ一つ一つまでも丁寧だ。この笑顔のために、両親は頑張っているのだなど深く心を動かされた。

「ただいま。」鍵を開けて入る家には当然誰もいない。しかし、今日も変わらずおいてある夕食をレンジに入れながら、私は誇らしくなる。

## 「優秀賞」

### 祖母のりょうり

伊藤 ジョシユア（アメリカ合衆国ハワイ州 高校生）

父の母、ベティーおばあちゃんは、私の大好きな祖母です。彼女は、昨年とつぜんてんごくに行ってしまった。彼女が毎しゅう土よう日のかぞくのばんごはんに、作ってくれたたくさんのおいしいりょうりをわすれることはないです。私にとって、彼女はとてもすばらしい人の一人です。とつてもかしこく、おもしろく、そしてりょうりがじょうずな人です。彼女は、私にたくさんのおいしいりょうりをおしえてくれました。彼女のラムりょうりとスタツフィングは、せかいでいちばんおいしいです。今でもときどき、私のゆめに出てきて、彼女とのたくさんのたのしかったことをおもいだします。彼女は、いつも私のしんぱいごとを聞いてくれて、そのおいしいりょうりで、そのふあんをいつもけしてくれました。私がいつも、おいしいと言って、ぜんぶたべおわるのを彼女はいつもうれしそうに見ていてくれました。ベティーおばあちゃんは、私たちの大好きなりょうりで今でも私たちをつないでくれています。母が、ばんごはんで祖母のレシピのりょうりを作るといつも、わ

たしたちは祖母のことをはなしては、みんなうれしくなつて、えがおになります。そして、いつも祖母と祖母のりょうりがとつてもこいしくなります。祖母は、たくさんの手書きのレシピとりょうり本を私たちにのこしてくれました。昨年のかんしゃさいは、祖母がのこしてくれたレシピでつくりました。でも、祖母のあじには、なりませんでした。祖母は、ほんとうにすごいなあっておもいました。その日のばんごはんは、もちろん祖母のはなしになつて、みんながえがおになるたのしいばんごはんになりました。祖母がいなくなつて、とてもかなしいけれど、たくさんのおもいでとたくさんの祖母のりょうりが、祖母と私を繋いでくれているとおもうとうれしくなり、えがおになります。

## 二人で眺めた夜空

菊池 真奈美（愛媛県 高校生）

「今日の夜、屋上で星見てみる？」

寒い中、学校から帰ってきた私に母が言った。どうやら新聞で流れ星についての記事を読んだらしい。急な提案で少し驚いたが私は「いいよ。」と返事をした。ご飯や課題、お風呂を済ませ、母と一緒に星を見る準備をした。レジャーシートを敷いたり椅子を置いたりした。大体の準備が終わった後、寒さ対策の毛布を持って私は母が待つ屋上に駆け上がった。二人で学校の話をしたり歌を歌ったりして流れ星を待った。しかし、なかなか見ることができない。それに加えてどんどん寒くなってくる。私は毛布にくるまりなおした後、夜空を見上げて昔飼っていた二匹の犬の名前を呼んでみた。すると、一つの流れ星が通った。「あ、通ったよ！」喜ぶ私に、「通った通った！」と母が言った。久しぶりに母と二人つきりで楽しんだ。それと同時に「寒いね。」とも言ってきた。私は母に自分ぐるまっていた毛布をかけた。母は「いいよ。大丈夫。まなちゃんが使ってた。」と言ったが、それに負けじと「私は全然大丈夫。お母さん

が使ってた。」と言った。毛布を母が使うか私が使うかの会話が数秒続いた後、結局は二人で使うことにした。私の後ろに母が座って、抱き着く形で星を見た。恥ずかしい気持ちもあったが母の包容力で幼い頃に戻った気がした。その後も時々、お茶を飲んだりお菓子を食べたりして流れ星を二人で待った。沢山とは言えないがいくつかの流れ星を見ることができた。普段の生活の中で流れ星を見る機会はめったに無い分、その日は私にとって少しだけハッピーな一日になった。夜空を見上げることで日々の疲れが消えていくように感じた。母と二人で見上げた夜空は私の心の中で今もお輝き続けている。そしてそのことは今の私の原動力となり、どんな壁にぶつかっても前に進んでいくエネルギー源となっている。

星を眺めた日に見た夢は、家族七人みんなで夜空を見上げる夢だった。

## 「入選」

### 「大好き」ということ

沖

花果（愛媛県 高校生）

「いつてきまーす。」

「いつてらっしやい、

気を付けてね、大好きー。」

「大好きー。」

これが我が家のいつもの光景だ。こういうことになったのは、妹が元だと思う。私の妹は、昔から、よく「大好き」という言葉を使っている。おはようの大好きや、いつてきます、いつてらっしやいの大好き、おやすみの大好きなど、事あるごとに言うのだ。そんな妹を見ていたからか、私たち家族も、「大好き」が口癖になっていた。

眠たくて、学校に行くのがしんどいなと思う朝も、家族からの大好きをもらうと、今日も頑張ろうと思える。

妹は、母に叱られた時、必ず最後に「大好き」と言う。ちゃんと反省してるのかなと思う時もあるが、結局、母も最後には笑って「大好き」と言う。そうやって、いつも仲直りするのだ。二人のその光景を見ると、私まで笑顔になり、その度に、幸せだなと心がじんわり温かくなる。なん

だか変な話だが、私にとっては、そのどれもが、かけがえない思い出だ。

私は、小学生の時、父の仕事の帰りが遅いと、姉や妹と一緒に、手紙を書いて先に寝ていた。父が翌日、とてもうれしそうにしていたのは、今でもよく覚えている。今は、自分のことで忙しくなり、手紙は書かなくなったが、家族とは、今でもずっと「大好き」という言葉でつながっている。「大好き」は消えないのだ。

これらの話を友達にすると、みんな驚く。少し変わっているのかもしれないが、私は毎日、家族の「大好き」に支えられている。だから、今日も「大好き」と言う。

## 「入選」

### 一片の灰色

田房 聖菜（愛媛県 高校生）

祖父は、五七五を愛していた。亡くなる直前まで詠み続けた。そういう私も俳句を心から愛しているが、それが祖父のおかげだと気が付いたのは、つい最近のことだ。

小学二年生のとき、テレビ特集で見た梅園の美しさに感動した私は（それを俳句と呼ぶべきかどうかは分からないが）十七音で構成される短文を作り上げた。そしていつもと同じように、喜び勇んで祖父の部屋に行った。何故なら祖父は、私のどんな句でも褒め称えてくれたから。でもその日は、反応が違っていた。いつものように、すごいな、もう一句作っといで、と頭を撫でてくれなかった。

「この、春をよぶってのはいいと思うけど、梅の花と季重なりで、ルール違反なんよ。」

一分間ほど考え込んでいた祖父の口から零れたのは、そんな言葉だった。口調は決して厳しくなかったが、真剣な祖父の目。私は祖父の隣に座った。祖父はそれから、まだ八歳の私にも分かるように気を遣い、丁寧に俳句のルールを教えてくれた。褒められなかったことは悔しかったが、

それ以上に大きな喜びがあった。私の作品に真剣に向き合ってくれる祖父、俳句に情熱を注ぐ祖父の姿を見た。

褒めてもらいたくて、頑張っただけの梅の句は、いつの間にか祖父が新聞の投句欄に出していたらしく、突然、新聞に掲載された。誰よりも嬉しそうに笑ったのは祖父だった。それから私は自信をつけ、祖父と競うように作品を作った。でも美しい俳句を生み出していた祖父の身体は、内側から少しずつ蝕まれていた。長年たばこを吸い続けていた祖父は、膀胱癌の宣告から半年で旅立ってしまった。

家族への感謝の一句が綴られた手帳が、最近見つかった。その中に、私の俳句が載った八年前の新聞がスクラップされていた。端まできちっと糊付けされた、一片の灰色。私の脳裏には、俳句への情熱に火をつけてくれたあの嬉しそうな表情がありありと映し出された。祖父の分まで、五七五を愛していたい。

## 「入選」

### きらきらと照る

三好 ミチル（愛媛県 高校生）

私の母はとても料理が得意だ。どんな料理も母が作ったものが何よりもおいしいと思う。そんな母の夢は、自分のお弁当屋さんを開くことだった。

少し前まで、母はあるお惣菜屋さんの手伝いをしていた。もはや深夜といえるほど早い時間に起きて、昼までお惣菜を売り、午後からはもとの自分の仕事に出掛けていく。母は毎日満身創痍のような状態だった。それでも母は欠かさず晩ごはんを作ってくれた。

「疲れるけど、好きでやっとするけんね。」  
そう言う母の顔は確かに輝いていた。しかし、当時の私は嬉しさより心配の方が勝っていて、何度か仕事を減らすことを勧めた。母は困ったように笑うだけだった。

新型コロナウイルスの影響でそのお惣菜屋さんが無くなってしまったのはごく最近だ。母は収入源が減ることよりも、お店の常連さんに申し訳無いということ、もう家族以外の誰かに自分の料理を提供する場所が無いことを嘆いていた。その日から、母はだんだんと沈み込むようになって

た。お惣菜さんの仕事があったときの方が元気かもしれないというほどまでに。母は私が思っているより自分の料理を食べてもらうことが好きだったのだ。一人でお弁当屋さんを開く方法や貸店舗の情報を調べてはため息をつく母に、私はどうすることもできなかった。

ある日、母に電話がかかってきた。お惣菜屋さんをしているときに知り合った方からだった。私はそのとき母の向かいにいて、一言話すたび母の表情がみるみる晴れていったのを覚えている。電話を切り母は言った。

「なんかお弁当屋さんでできるらしいわ。」  
まだしっかりと決まっていなくても、どうやらごはんを作る仕事ができるらしい。

「よかった、本当によかった。」  
あれこれとやりたいこと、作りたいものに想いを馳せる母の笑顔は、希望を全身に集めたようにきらきらと照っていた。

## 「入選」

### 最高のプレゼント

門口 徳克（愛媛県 高校生）

おじいちゃんの笑顔はいつ見ても僕に元気をくれた。学校に行くとき、部活が終わって家に帰ってくるとき、休みの日に遊びに行くときなど様々な場面で出会っていた。その笑顔を見ることはもう二度と出来ないのだ。今年に入ってからすぐ、不慮の事故で亡くなったから。いつも見えていた景色が急になくなり、僕の心には埋めることの出来ない大きな穴が開いてしまった。僕の中で時間が止まってしまった。そんな調子で過ごしていたある日、僕はふとあることを思い出した。おじいちゃんが生前に身につけていた腕時計を貰っていたのだ。その腕時計を貰ったのは、小学生の頃だった。おじいちゃんが身につけている腕時計がかっこよくいつか欲しいなと思っていた。僕の誕生日の日に「好きなもん一個買ってあげらい」とおじいちゃんに言われて僕は口早に「おじいちゃんの腕時計！」と答えた。それを聞いた瞬間おじいちゃんは笑っていた。まさか自分の腕時計を欲しいと言うなんて思いもしなかったことだろう。その時の笑った顔は今でも忘れられない。この腕時計

を見つけた時に、止まっていた時間が再び動き出した。僕は、長い間抜け出せない部屋に籠りきっていた。その部屋の中では誰とも話すことはなかった。むしろ僕には、話す気は微塵も起きなかった。あの時一番話をしたかったのはおじいちゃんだった。そんなことを考えながら生活していたある日、夢の中でおじいちゃんと出会った。久しぶりに話せると思い涙目になっていた。おじいちゃんとの会話の中で腕時計の話が出てきた。僕は、おじいちゃんにどうして腕時計をくれたのか尋ねた。おじいちゃんが答えようとする所で目が覚めてしまった。この夢を見た事である部屋から抜け出す事が出来た。僕に残っているのは、腕時計だけだ。これはお金で買うことの出来ない大切な物である。この腕時計を見るとあの頃の記憶が蘇る。時計の針は止まっても、僕の針は前に進み続ける。

## 「入選」

### 私を支えてくれた大切なもの

河野 有紗（愛媛県 高校生）

高校受験まで残り一か月半。凍てつく寒さの中、カレンダーが瞬きのようにめくれていく。「あなたなら出来る。」この手の励ましの言葉さえプレッシャーに感じた。ラストスパートと言いながら時間が足りない。どんどん増えていくコロナ感染者。様々な不安に押しつぶされそうになり、眠れない夜もあった。焦る気持ちと反比例しながら無情に過ぎていく日々。

そんなある日、家族から大袋のキットカットが渡された。それはえらく膨らんで、ずしんと重く、何故かすでに開封済みであった。不思議に思いながらも私は、恐る恐る中に手を入れた。いつも通りの普段と変わらないキットカットが入っていた。が、次の瞬間、目頭がカーッと熱くなり視界がぼやけた。堰を切り、大粒の涙が止め処もなく雨のようにポロポロ落ちた。今まで溜めていたものが溢れ出るように。そのキットカットは応援メッセージが書かれていた。家族や祖父母、叔母、私の一番大切な人たちからの手書きのラブコール。

「これから毎日、一つずつおみくじみたいに引いてね。」と笑顔で言う母に思わず飛びついた。

私はその日から机に向かう時、慎重に選び、顔を想像しながらメッセージに込められた想いに救われた。戦っているのは私一人じゃない、家族がそばにいる。私はこんなにも勉強に全力を注げられている事や、家族の中で自分という存在でいられる事に、心から感謝した。人を思いやることの本当の意味を知った。

四十五日分のキットカットの袋は一つ残らず、全て大切に机にしまっている。時折、そっと出して読み返し胸の奥から溢れ出る温かい想いを未だにかみしめている。今度は、私が誰かのためにこの感動を繋げていこう。そう強く思う。

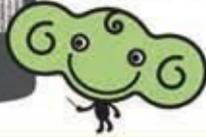
大きな文字で いつでもどこでも 1週間分 まとめ読み



# いつもの愛媛新聞を スマホ・タブレットで。

キーワード検索など便利な機能も満載。  
詳しくはお申し込み WEB サイトで!

- 愛媛新聞ご購読契約者(個人)は、追加料金なしでご利用いただけます。
- 電子版のみのご契約(個人)も可能です。利用料(1ヵ月)3,400円(税込)



電子版のご利用には、  
アカウントくらぶ読者会員登録が必要です。  
詳しくは、【二次元コード】もしくは【検索】で!!

愛媛 電子版 検索 <https://www.ehime-np.co.jp/prepaper/>



こども新聞やリックの電子版も見られます!

- 「ジュニアすみめ新聞 スマイル!ピント」 毎週日曜発行  
小学校高学年～中学生向け。話題のニュースをやさしく解説。学びに役立つ記事も盛りだくさん。
- 「ウィークリースみめリック」 毎週金曜発行  
毎日の話題や地域イベントの情報が満載。グルメやレジャー、住まいなどの生活情報も充実。

お問い合わせは愛媛新聞電子版サポートセンターへ

**TEL089-935-2001**

【受け付け時間】●平日：午前9時～午後7時 ●土・日・祝：午前9時～午後6時

未来へ。  
あきらめず、  
あきらめず、  
あきらめず、

地域に根ざす、  
信用金庫として。  
手から手へ。  
心から心へと。  
つなげてゆきたい  
想いがあります。



愛媛信用金庫

『地域とともに、未来をえがく』



住友金属鉱山株式会社  
住友化学株式会社  
住友重機工業株式会社  
住友共同電力株式会社  
住友林業株式会社  
三井住友建設株式会社

安心と信頼の絆で、  
未来に寄り添う。

くらしの保障、相談するなら



- ご加入にあたりましては、お近くのJA(農協)へお問い合わせください。どなたでもご相談いただけます。
- JA 共済ホームページアドレス <https://www.ja-kyosai.or.jp>

# 「写真部門」

知事賞

夢は警察官

馬場 このみ(埼玉県)

大好きな警察官になれて  
大喜びです。



特別賞

丸かじり

青野 早輝(愛媛県)

ひーばーちゃんの畑で採れた  
スイカです。

河原学園賞

夏がやってきたよ!

門田 幸恵(愛媛県)

ママと初めてひまわり畑に来ました。  
一生懸命ジャンプをして、  
ひまわりに届かなくても  
楽しくはしゃいでいました。  
とても楽しそうでした。





優秀賞

### おかえり

寺澤 智恵(愛知県)

学校に送り出す時「今日も無事で」と見送っています。「ただいま」「おかえり」を言える幸せを日々噛み締めています。



優秀賞

### おしどり夫婦

水口 ゆみ(徳島県)

二人一緒に桜を見に行こうと言い始めて3年目に、ようやく夫婦揃って桜を見せてあげることが出来て良かった。



優秀賞

### 見つかったー

三木 宏太郎(愛媛県)

超かわいい娘のイタズラ目撃現場の写真です。

入選



祭りの衆

田中 雅之(京都府)

裏方に徹して祭りの成功を見守り、  
幕間に見せる豪快な笑いは、  
祭りが順調に執り行われている  
証しだと思いました。



初めてのお餅

渡部 博也(愛媛県)

初めてお餅を食べました。  
ノビノビを初体験。



スマイル

尾鷲 陽一(埼玉県)

公園で姉妹仲良く遊んでいたときの  
ふとした瞬間。  
最高の笑顔に慌てて  
カメラを向けました。



入選



息子と記念撮影

鈴木 文代(和歌山県)

息子が成人した日、お母さんは大喜びで、  
息子の友達に  
記念撮影をお願いしました。



はじめまして!

鄭 信義(兵庫県)

コロナ禍で会えなかった  
おばあちゃんと孫との  
初対面の写真です。





一般の部



愛媛広告協会賞

大玉すいか7,200g

奥田 浩二(大阪府)

5ヶ月記念に、夏の風物詩のすいかになって写真を撮りました。  
息子のおかげで、我が家にはいつも愛顔が絶えません。

愛媛県商工会議所連合会賞

10人揃って、ハイチーズ。

宮谷 拓也(愛媛県)

家族4人で始まった「絆会」も今では10人に。  
これからも1回でも多くみんなが愛顔で集まれますように。



小・中・高校生の部

(小学生未満含む)

愛媛県IT推進協会賞

ばば!

渥美 満優子(愛知県 高校生)

素敵なお家族を撮影させていただきました。  
子供たちがばばのたくましい腕におさまるのも  
あとどのくらいかなあ...



愛媛経済同友会賞

夏休みの思い出

成田 衣織(愛知県 高校生)

水遊びを楽しむ自然な表情を撮りました。



愛媛県歯科医師会賞

**夏色summer**

宇貫 航平(群馬県 高校生)

この日はとても暑かったです。



愛媛県情報サービス産業協議会賞

**幸せなとき**

五村 心優(福井県 高校生)

公園で仲の良い兄弟を撮らせていただきました。近くにいたお母さんも優しい笑顔で見つめていました。

愛媛県理容生活衛生同業組合賞

**勝利のガッツポーズ**

友澤 彩乃(熊本県 高校生)

試合で勝った時の顧問の先生の写真です。普段は厳しく笑った所を見たことがありませんでしたがこの瞬間初めて先生の笑顔を見ることが出来ました。

小・中・高校生の部

(小学生未満含む)



愛媛県獣医師会賞

**どうだ子よ**

川村 悟史(愛知県 高校生)

野球の保護者VS子供の試合でホームに帰ってきたシーンです。



# 世界中の人々へ やさしい未来をつむぐ

## 地球環境への貢献

私たち大王製紙グループは、  
地球環境と調和したグローバルな事業展開を通じて  
環境問題に積極的に取り組み、  
持続可能な社会の実現を目指します。

- グループで使用するエネルギーの約50%を、廃棄物を燃料としたバイオマスエネルギーに転換
- ボイラーの燃料を石炭や重油の化石燃料から、木くず・紙くず・廃プラスチック固形燃料（RPF）、  
鹿タイヤなどのバイオマス燃料に転換することでCO<sub>2</sub>を削減



バイオマスエネルギー比率 約 **50%**

**大王製紙株式会社** 愛媛県四国中央市三島新町2-60 TEL0896-23-9001 <https://www.daio-paper.co.jp/>



広告

好きになれるスーパーってなんだろう？

私たちはその答えに向かって、たくさんの試みを始めます。

まじめに、たのしく、あたらしく。笑顔や便利や

ワクワクする体験をたくさん生み出していく、フジへ。

この街に、あってよかったと、

たくさんの人に言ってもらえるように。

これからのフジに、ご期待ください。

この街に、あってよかった。



【本部】松山市宮西一丁目2番1号

感動を、けずりだそう。

**マルトモ**



鹿児島県枕崎製造のプレミアムなかつお枯節を使用。  
「おいしさ1.5倍」の成形色が特長です。 ※当社一般品比

「プレ節」J25ミクロン  
花けずり



259袋 / 50g袋

「プレ節」J25ミクロン  
ソフトけずり



209袋



1.59×12袋

好評  
発売中

盛り付け例：ソフトけずり

【本社】〒799-3192 愛媛県伊予市米湊1696番地 TEL.(089)982-1151

マルトモ <https://www.marutomo.co.jp>

## グランプリ

熊本県立沓沓高等学校放送部

原作：横山 紗音「秋の夕暮れ」

令和2年度 高校生以下の部 優秀賞



## 愛顔 感動ものがたり

ショートフィルム



愛媛国際映画祭では、愛顔感動ものがたり  
感動のエピソードを原作とする、  
ショートフィルムコンテストを開催しています。  
令和2年度のエピソード部門受賞作品を原作とした  
映像作品をご紹介します。

受賞作品は愛媛国際映画祭HPで公開しています。ぜひご覧ください。





# 審査委員紹介



新井 満 (名誉審査委員長)

1946年新潟県生まれ。作家、作詞作曲家、写真家など多方面で活躍。1988年、『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。2005年、『この街で』(作詞・新井満、作曲・新井満、三宮麻由子)を制作。

2007年、『千の風になつて』で第49回日本レコード大賞作曲賞を受賞。2014年、正岡子規の俳句にメロディをつけ、松山市民の愛唱歌「春や昔」を制作。子どもから大人まで松山市民に愛される曲となる。2018年、『石鎚山』を作詞・作曲。2021年12月、御逝去。

\* 謹んで御冥福を御祈りいたします。



イツセー尾形 (審査委員長)

1952年福岡県生まれ。1982年より現在まで続く「フツの人の日常を描く」一人芝居を開始。一方で映画にも出演。

2003年「トニー滝谷」(市川準監督)  
2005年「太陽」(アレクサンドル・ソクーロフ監督)  
2016年「沈黙」(スコセッシ監督)  
2021年「ONODA」(アルチュール・アラリ監督)  
TVでは「未解決事件警察庁長官狙撃事件」「スカレット」「ワタシたちはガイジンじゃない!」「トックイ」「青天を衝け」など多数。  
2021年刊行「シェイクスピア・カバース」の執筆等幅広く活動中。  
一貫して人間賛歌を表現し続けている。



神野 紗希 (審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。1983年愛媛県立松山高等学校。立教大学・聖心女子大学講師。松山東高等学校在学中、俳句甲子園をきっかけに俳句をはじめ。歴代最年少で桂信子賞を受賞するなど、若手俳人のリーダー的存在として活躍。「HAIKU LABO」を立ち上げ、愛媛の観光やものづくりを俳句で発信する。

2019年、『日めぐり子規・漱石 俳句でめぐる365日』で第34回愛媛出版文化賞受賞。著書にエッセイ集『もう泣かない電気毛布は裏切らない』など。2020年、最新句集『すみれそよぐ』刊行。



中村 時広 (審査委員)

1960年愛媛県松山市生まれ。1982年三菱商事株式会社入社。1987年愛媛県議会議員。1993年衆議院議員。1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。2010年愛媛県知事。2018年3選、現在3期目。

## 写真部門審査協力

- |          |       |
|----------|-------|
| 愛媛県美術会理事 | 日野 義治 |
| 同 常任評議員  | 大内 清俊 |
| 同 常任評議員  | 楠本 真人 |



## 表彰式イベントゲスト朗読者紹介



紺野 美沙子

1980年、慶応義塾大学在学中にNHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役でデビュー。  
1987年、日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。

1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、国際協力の分野でも活動中。  
2010年秋から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。音楽や影絵や映像など、様々なジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。



中川 奈美

ナレーター・声優・歌手。  
愛媛県伊予観光大使「いよかん大使」。  
うわじまアンバサダー。

アニメ「鬼滅の刃」挿入歌「竈門炭治郎のうた」、ゲーム「テイルズ オブ」シリーズ主題歌、ゲーム「GOD EATER」シリーズなど、多数の歌唱を担当。  
劇団シェイクスピア・シアターにて「喋る」ことの本質を学ぶ。  
一龍斎春水講談「金子みすゞ」詩作朗読のほか、介護士からの視点を描いたオリジナル朗読「介護士の思い出」書き下ろし朗読。

師命名の「ぐるいぶ虎」を主催し年3回の朗読公演を行いながら、東日本大震災を受けてボランティア活動の一環として歌・朗読を福島・岩手にて行う。  
2020年12月えひめキネコ映画祭にて、生アテレコを行った。



水樹 奈々 (ビデオ出演)

愛媛県新居浜市生まれ。  
声優・歌手

『NARUTOーナルトー』、『ハートキャッチプリキュア!』、『ONE PIECE』など多数のアニメーション作品に出演。

外画の吹き替えやナレーション、ラジオパーソナリティ、ミュージカルの主演等と多岐に渡り活躍。

アーティストとしても声優史上初のオリコン首位を獲得、NHK紅白歌合戦に6年連続で出場、東京ドームや阪神甲子園球場などスタジアムクラスの公演も成功させる。

第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞大衆芸能部門受賞。

## 新井名誉審査委員長メッセージ

愛顔感動ものがたり によせて

新井 満

悲しみを越えた大きな空に  
喜びの虹がかかっています  
悲しみ  
喜び  
人生

バンザイ

# 子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを  
はじめとした様々なCSR活動を通じて、  
自然と調和・共生できる  
循環型社会の実現をめざし、地域の皆様の  
豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター  
ばんじゃくん



## JAバンクえひめ

JA うま

JA おちいまばり

JA えひめ中央

JA ひがしうわ

JA えひめ未来

JA 今治立花

JA 愛媛たいき

JA えひめ南

JA 周桑

JA 松山市

JA にしうわ

JA 愛媛県信連



**JAバンク えひめ**  
(愛媛県内JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県内11JAと愛媛県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索

愛<sup>え</sup>顔<sup>がお</sup>感動ものがたり  
「感動のエピソード」  
& 「愛顔の写真」

令和四年二月発行

発行 愛媛県

観光スポーツ文化部文化局

文化振興課

〒七九〇一八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四一

TEL (〇八九) 九四七一五五八一

印刷 株式会社 美統

■令和2年度 一般の部 知事賞

「どこか、遠いかなたから」和田 紀世美



やがて私も七十歳半ばになった夏、  
白内障の手術を受けることになった。

■令和2年度 高校生以下の部 知事賞

「たからもの」阿部 奏大



おじいちゃんは僕に渡していた折り鶴と  
同じ色で同じ数だけ折っていたのだった。

「エピソード」部門の知事賞（平成28年度までは知事賞・特別賞）  
受賞作品については、水樹奈々さんの朗読に合わせたオリジナル  
動画作品をインターネットで配信しています。



愛顔感動ものがたり

検索

